

月の花挽歌 ～9. ^{にちにち} 日日平安～

9-2

過熱気味なうえに急展開しすぎる映画制作談議に、一旦、間を置きたかったTは「私の記憶では、Kさんは黒澤監督作品に出られたことはなかったような気がします？」と話題を変えた。

Tの口調にレコードの針飛びのような耳障り感是否めなかったが、「それが、一本だけあります。五十年程前に東宝で発生した労働争議が長引いたものですから、五社協定ができる前でしたので、黒澤さんも松竹でメガホンを取ることになったのです」とKは記憶を辿りながら話し続けた。「ロシアの文豪ドストエフスキーが書いた『白痴』を土台にして舞台を札幌に変えて制作した同名の映画に、新人でしたので、ノンクレジットで出演しました」

「ノンクレジットでしたか！貴女が？信じられませんね！三船敏郎と原節子が初共演したことでも注目された話題作でしたね。当時、子役だった私でさえも、周りの業界人たちがざわついてたのを覚えています」とTは感慨深げに言った。

「私は『白痴』と同時進行で撮っていた、黒澤さんがシナリオを書かれた作品『獣の宿』で本格デビューをさせていただきました。ですから、黒澤さんとの関わりは、映画が一本とシナリオが一本です」とKは慎重に言葉を選んで言った。

Tが黙ったまま肯いて、濃い目にしたブランデーの水割りを三口で飲み切るとグラスの中の氷が鳴った。

ひと呼吸置いたKは、「『獣の宿』は、『白痴』の二週間後に封切られました。奇しくも溝口健二監督の『お遊さま』や小津安二郎監督の『麦秋』なども公開された年で、巨匠揃い踏みの三作品の末席を汚させていただいた思い出深い作品です」と往時を偲ぶように語った。

大女優で文筆家でもあるKの話に聞き入っていた今、もっとも脂の乗っていると言われている男優と女優は、銀座の一流クラブと呼ばれる非日常の場で、世界も認める三人の巨匠を身近に感じる事ができた。

新旧が入り混じる俳優たちがフィクションのパラドックスに共鳴し合う様相に、真紀は他の席へも顔出しをしなければと気を揉みつつも、極めてまれなことだが、そうはできないことへの焦燥感に駆られていた。

真紀とは別の理由で退席する機を逸していた横田も、半ば諦め加減で流れに身を任せていた。